

「巻頭特集」 来振寺の節分星まつり

心願成就を祈り、火渡りに挑む

大野町稲富に境内を構える宝雲山明星院来振寺。霊亀元(七二五)年、行基の開山と伝える古刹で、毎年、二月の第二日曜日に、「節分星まつり」を修する。当日は護摩法要や火渡り、福豆まきなどが行われ、普段は閑静な寺も多くの参詣者でにぎわう。

自分の宿星を供養する 柴燈大護摩供を動修

星まつりとは、年の変わり目の節分に、一年ごとに巡って来てその年の運命を左右する「当年星」と、生まれた年によって定まる「本命星」を供養し、新たな年の除災招福を祈念する祭りである。星供養、星供とも呼ばれる。

本命星は生まれた年によって定まるので、一生変わることがない。その一方、当年星は年々順を追って巡り来る星で、九曜という九つの星(羅喉星、土曜星、水曜星、金曜星、日曜星、火曜星、計都星、月曜星、木曜星)からなる。

この九曜星は古来インドにおいて占星術に用いられた星で、日本では陰陽家が人の生年に配当して、運命の吉凶を判ずるようになったという。中でも火曜星、羅喉星、計都星は凶星を司り、いわゆる厄年にあたる。

平成三十一年に本厄を迎えるのは、男性では平成七年生(二十五歳)、昭和五十三年生(四十二歳)、昭和三十三年生(六十二歳)、女性では平成十四年生(三十二歳)、昭和六十一年生(五十二歳)、昭和六十三年生(五十四歳)となる。

(三十三歳)、昭和五十八年生(三十七歳)である。年齢は数え年で表記している。

厄年も心のあり様一つ、といわれるが、星まつりで災厄を除き、福を招くのもおすすだ。来振寺では星供養曼荼羅と五大尊を祀り、護摩を焚き、諸願成就を祈願する。

結界を巡らした道場で 炭火の上を素足で歩く

来振寺の節分星まつりは、大野町の無形民俗文化財に指定されており、春の風物詩として親しまれてきた。

当日の十三時半。導師、僧侶、来賓、厄年の男女らが大師堂に集い、柴燈護摩の安全を祈る法要が営まれる。その後、山伏を先頭に一同は境内を練り、不動堂前に設けられた結界道場へ移る。薪を積み重ね、松葉を被せた護摩壇が組まれている。

山神に薪の使用を乞う「斧作法」に続き、四方と鬼門、天地中央に計六本の矢を射り、魔を払う「法弓結界」、不動剣で九字を切つて心の魔を封じる「法剣結界」、生物の心を静める「法螺吹鳴」と、真言密教の秘法に則った修法が肅々と進められ

ていく。導師による願文奏上が行われると、いよいよ護摩壇に点火となる。

炎が静まりかけた十五時頃、護摩壇を崩して、火渡りの準備が始まる。護摩木の炭火を敷き詰めた道は約九メートル。「苦を超えろ」という意味があるそうだ。まず導師が渡り、山伏、来賓、厄年の男女、一般の参詣者が続く。御幣を胸に、願望成就を祈りつつ、火渡りに臨む。渡り終ると、導師から頭上、両肩に「法剣加持」を受ける。

「一般の方は当日の朝、参加の申し込みをしていただけます。前日また

聖武天皇から勅願寺を 拜命した由緒ある寺院

来振寺は真言宗智山派の寺院。開

は当日の朝に身を清めた上で、火渡りをしていただくのが望ましいですね。風邪をひかなくなつたという声もよく聞きます」と明星良昌住職。

境内では参詣者に護摩壇の火で作った笹酒が振る舞われるほか、約二万袋の福豆まきが行われる。笹酒は長寿、がん封じの妙薬とされ、千袋の豆袋には宝券(景品の引換券)が入つていて、福を授かるうと、例年大勢の人たちが詰めかける。

1. 導師に続いて火渡りをする山伏たち。写真ではわからないが、地面に敷き詰められた護摩木の間からは、いまだ赤々と炎があがる
2. 知恵の火で燃えあがる護摩壇に対し、明星住職(導師)が願文奏上を行う
3. 一般参詣者の火渡り。1200人を超える人々が火渡りをしたこともあったが、豆まきの時間が遅くなってしまうため、現在は人数制限(約400人)をしている



福豆まきの様子



(右)法螺を高らかに吹き鳴らしながら、山伏たちが護摩壇が設けられた結界道場へ向かう
(左)火渡りを終えた人たちは、導師から法剣加持を受ける



国宝「絹本着色五大尊像」は平成31年2月19日～3月14日の期間、寄託している奈良国立博物館の「奈良博名品展」にて展示公開される。写真は御分身(レプリカ)で、大師堂に掲げられている



例年、節分星まつりの時季には境内に雪が残っている。そんな寒さ厳しい中でも、多くの檀信徒が参詣に訪れる

information

宝雲山明星院来振寺

大野町稲富397-1
TEL0585-32-0078
http://kiburiji.com

●節分星まつり

2月3日[日] 13:30～

申し込み・問い合わせ
TEL0585-32-0078



節分星まつりの際、山伏により不動堂前に安置される背負い厨子。明星住職が作ったという



来振寺第42世住職
明星良昌さん

(九三七年)年、真言宗に改宗した。鎌倉時代に入ると寺は隆盛を極め、多数の僧兵を擁する大寺院だつたと伝わる。享祿三(一五三〇)年、根尾川の洪水で大きな被害を受け、さらには永祿三(一五六〇)年の織田信長の兵火により多くの堂宇が焼失し、一時衰退した。

現在の大師堂や本堂などは、昭和四十二(一九六七年)以降の再建。寺は西美濃二十三霊場第一番札所、美濃新四国第五十五番札所ともなっている。広い境内は端然とした佇まいで、明星住職によれば、野生の鹿が時折姿を見せるそうだ。